救いの歴史を考えながら創世記を読む

2012年4月14日
佐々木正明

聖書という本は非常に膨大で、なかなか読みこなすまでにはなれません。一部分だけでも分かったような気持ちになることもありますが、全体を把握するまでは、相当の時間がかかります。というより、それはほとんど無理に近いことです。また、全体を把握しなければ、個々の書が良く分からないと言うこともあって、ますます混乱してしまいます。

本当は、どのような本を読むのでも先入観を持たずに読むのが良いのかもしれませんが、聖書の場合は、ある程度の予備知識を持っていたほうが、無難と言えるでしょう。ただ、その予備知識が曲者で、しばしばとんでもない方向に導かれることもあります。

そこで今回は、聖書を「霊感によって書かれた誤りのない神の言葉」と認めるクリスチャンの立場から、是非、聖書の最初の書物である創世記を理解し、その重要性に気付いて欲しいと願い、この文に取り掛かります。そのためにまず、聖書の全体像の輪郭だけでも見てもらいたいと思います。輪郭ですから、極めて基礎的な予備知識です。

Ｉ.　神の霊感によって書かれた神の言葉

聖書は普通の文書、つまり、古代の詩歌、歴史、法律、あるいは宗教生活について記された本として読んでも、結構面白いところがあります。聖書と言うのは紀元前1300年前後から紀元100年近くまでにわたって、40人ほどの著者によって書かれた、66冊の本をひとまとめにしたものです。そのほとんどは、今で言うイスラエルかその近辺の中東、あるいは紀元後100年以内のローマ帝国内で書かれたものです。

一見、まったくばらばらで何のかかわりもないような書物が、実は一貫したテーマの下に書き記されたものであることに気付くと、聖書はとても読みやすいものとなります。この一貫したテーマと言うものは、聖書を書かせてくださったのが、神であったという事実に拠ります。誰かが全体の背後に居なければ、一貫したテーマを持つことは出来ません。

聖書を書いたのは40人以上の人たちですが、その人たちは、神の霊によって導かれて書いたというのが、「神の霊感によって書かれた」という意味です。ただ、この霊感と言う言葉の意味を取り違えないようにしなければなりません。ちまたで使われている霊感という

言葉の意味とは、まったく違うからです。

聖書を書かせて下った神の霊感というのは、実際に筆記用具を握っている人間がある種の人事不省の状態、トランスに陥って霊の言うとおりのことを書く、いわゆる「お筆先」とは違います。かえって、まったく通常の精神状態で、通常に目覚めた中で書きながら、神の霊の働きかけを受けて書くのです。神の霊の働きかけを受けていると感じながら書いた場合もあったかもしれませんが、むしろ大部分の記者はまったく何も感じないまま、普通の精神状態で書いたと思われます。普通の歴史を記すように、普通の詩歌を書き記すように書いたはずです。

書いた人たちの中には、預言者といわれる人々も居ましたので、彼らは、神の言葉を聞いたり、幻を見たり、神様からの直感的賜物で物事を理解したりして書いた部分もありましたが、その場合でも、書いたときはごく普通の精神状態で書いています。

ですから、霊感というのは、何から何まで神様のおっしゃるとおりに書くのではなく、記者が書きたいと思ったことを、記者の言葉と記者の能力で自由に書くのですが、その背後に、神の導きと守りがあったと言うことです。導きと言うのは、何を書くかということについて導かれていたと言うことであり、守りというのは、神のみ心に反したこと、つまり、間違いを書かないように守られていたということです。ですからそれぞれの書には、記者の癖や性格、あるいは能力や知識が反映されています。

聖書の中には、聖書の記者が聞き知ったこと、学んだこと、あるいは体験したことが書かれています。実際そのようなことが大部分です。しかし、中には、預言者たちが聞いた神の直接の言葉や幻なども含まれています。あるいは、神以外に知りようがない事柄もあります。たとえば、有史以前の物語や、天地創造の物語などはその代表的なものです。それらの多くは、直接、神によって示されたと考える以外に考えようがありません。また、古代の文書や言い伝えを覚えていて、それを書き記したこともあり得ます。

たとえば、「目には目を」という律法は、創世記よりも 500 年以上も古い、ハムラビ法典に記されているのと同じです。古代の人たちが何らかの理由で神のみ心にある律法を知っていて、そのように記したとしてもおかしくありません。また、ハムラビ法典に記された言葉を聖書の記者が知っていて、それを書き記したとしてもおかしくありません。大切なのは、そのような事柄の背後に神の霊が働いて、正しく導き、間違いなく書かせてくださったという事実です。

ここでいう「間違いなく」というのは、現代の科学的事実に照らし合わせて間違いなく

と言う意味ではありません。神のみ心を間違いなく記したということで、数千年後の 21 世紀に住む人たちが科学的に間違っていると判断するようなことでも、神がそのとき、「それでよし」とお考えになったのなら、間違いなく記したということになるのです。300 年後、科学的事実をさらに重んじる世界が到来して、科学的事実に反することは絶対に言ってはならないと、「言葉狩り」が行われたと仮定しましょう。すると、「太陽が昇ったと」言う言葉も、「太陽が沈んだ」と言う表現も使えなくなります。「太陽が雲に隠れた」とも、「太陽が雲に覆われた」とも言えなくなります。科学的事実に反するからです。もちろん「はらわたが煮えくり返る」と言ってはならないし、「五臓六腑にしみわたる」とも言ってはいけなくなります。

Ⅱ. テーマに沿ってかかれ、テーマに沿って編纂された神の言葉

聖書はいろいろなことが書かれたたくさんの書物が編纂されたものです。一見何のまとまりもないように思えるのですが、実は、神がすべての書物の執筆の背後で働いてくださり、神の導きのうちに書かれたのです。聖書の中に一貫して流れるテーマは、「神の救い」です。

罪を犯して神から追放され、悪魔の支配に下った人類は、悪魔の力の中で神に敵対して生きることになってしまいました。そのまま生き続けると、この世界は悪魔の支配の中に完全に堕落し、人類の未来には何の希望もなくなってしまいます。神はご自分の聖い性質のゆえに、そのような人類を、悪魔と共に滅ぼしてしまわなければなりません。ところが、始めから「愛」として存在しておられた神は、ご自分の愛の対象としてお造りになった人類を、そのような不孝な結末に陥れることをお望みになりませんでした。神の愛は、惨めな人間に対する哀れみとなって現れ、この人間を何とかして救い出そうという決心と行動となって行きました。

聖書とは、この、神の救いについて記しているものです。神がどのようにして人類を創造し、どのように理想的な生き方をさせてくださっていたか、しかし人間は、どのようにして神に逆らい、悪魔の下に降ったか、そして神から受けたいのちを失ってしまったか、それを神はどれほど哀れみ、どのようにして救おうとなさったかが記されています。

聖書の第二番目の書物、すなわち、出エジプト記から旧約聖書の最後の書であるマラキ書までは、神が人類を救うために特別に選び出した一つの民族、イスラエルに対する神様の取り扱いが記され、イスラエル民族を通して世界が神の祝福を受けるという、創世記に記された約束が成就するまでの道程を記しています。つまり、出エジプト記からマラキ書までは、イスラエル民族を守り導く神の姿が記され、その中で、神がやがて救い主を与え

てくださるという約束が次第に明らかになっていきます。

出エジプト記からマラキ書までは、神の律法、神に逆らっては厳しく罰せられることを繰り返す、およそ 1000 年にわたるイスラエル民族の歴史、そのような中での人々の暮らしや、宗教生活、歌、格言、そして神の励ましや警告が記された預言などが編纂されています。その中で重要なのは、しばしば、様々な形でくり返しくり返し約束される、救い主の誕生です。

神は、この救い主を始めから全人類の救い主として準備しておられましたが、その救い主の約束は、救い主を生まれさせる民族として選ばれたイスラエルに与えられたために、また、イスラエルはしばしば神にそむき、厳しい神の刑罰を受け、他民族の蹂躙と支配を長い間受け続けてきたために、間違って、イスラエル国家の救い主として待ち望まれるようになりました。

マラキ書が書かれてからおよそ 300 年少々を過ぎ、神の約束はイエス・キリストの誕生によって成就されました。キリストの誕生とその生涯と教えについて記しているのが新約聖書の始めの四つの福音書です。それから、キリストの生涯の最後の一日と、その後のキリストの弟子たちの活動の様子を記録したのが、使徒の働き（使徒行伝、使徒言行録）であり、出来上がってきたキリストの弟子たちの集まり、すなわち教会の発展と進展を記し、教会に対する様々な教育指導を与えているのが、その後に続く多くの書簡です。

新約聖書で大切なことは、イスラエル民族に約束された救い主は、実はイスラエル民族の救い主ではなく、全人類の救い主であったという事実が記されていることです。始めのうちこそ、キリストの奇跡を見、教えを聞いたイスラエルの人々は、キリストを自分たちの救い主であると考えて歓呼して迎えますが、やがてイスラエル民族の救い主ではないと気付き、怒りのあまりに十字架に付けて殺してしまいます。しかし、この十字架の死こそ、神が全人類の救いのために準備された手段であったことが、多くの書簡で明らかにされています。

キリストの弟子たちも、始めのうちはイスラエル人がほとんどだったために、（当時はユダヤ人という呼び名が普通）彼らも、キリストはイスラエル民族の救い主であると理解し、イスラエル人以外の人々、すなわち異邦人が救われるためには、まず、イスラエル人にならなければならないと考えていました。しかし、キリストは全人類の救い主として来てくださったのであり、異邦人もイスラエル人にならずに、異邦人のままで神の救いに入ることが出来るということが、新約聖書全体を通して強く教えられています。

そして紀元 90 年過ぎに書かれたと思われる黙示録は、聖書の最後の書物ですが、神の救いの完成が描き出されています。そのとき、神の敵であった悪魔とその手下どもはみな滅ぼされ、救いに入った人々は、その壊れた人間性を完全に回復してもらい、心も肉体も健全なものとされるのです。また、自然の世界も最初の世界のように完全なものとされます。そしてさらに大切なこととして、人間と神との隔てのない交わりの回復が教えられています。最初の人類の反逆によって失われた神との交わりが完全に回復され、神と人は豊かな愛の交わりの中に生きるのです。

このように、聖書はそれぞればらばらのことを書いていてまとまりがないように見えながら、神が人間に与えてくださる救いというテーマが、始めから終わりまで一貫して大きな川のように流れているのです。このテーマをしっかりと心に留め、聖書を読むことが大切です。

Ⅲ.　創世記を読む

創世記も神の救いをテーマとして書かれています。しかしこの書物はいろいろな意味で特異なものです。この書をもっとも特異にしているのは、この書が、イスラエル民族が選び出される前のことについても記していることであり、イスラエル民族が選ばれたいきさつも、選ばれていながら、実際にはまだ選ばれた民族としての特性を現していないときのことも記しているのです。

創世記のあとに続く書物はみな、もっぱら神の救いのために選ばれたイスラエル民族について記され、（ヨブ記だけは例外かもしれません）神がイスラエル民族をどのように取り扱い、イスラエル民族は神に対していかに不忠実に生きたかということが記されています。全体的に言うとそれは、不忠実、不従順なイスラエル民族を、神が忍耐の限りを尽くして教え導き守り、世界の救いのために役立つ民族になれるようにしてくださった歴史です。そこには幾度も神に反逆するイスラエル民族を正しく導こうとする、厳しく恐ろしい怒りの神の姿が突出して、優しく、恵と哀れみに富む赦しの神の姿が、背後に隠されてしまっています。

創世記は、イスラエル民族に与えられた書物でありながら、イスラエル民族の枠に入れられていない事柄、全人類に直接及ぶ事柄が記されているのです。そういう意味でこの書物は、聖書の中の他のどの書物に比べても大切なものです。創世記に記されていて、他の書物には記されていない大切なことの中には、創世記の名前の由来となった天地創造の物語があり、そこには天体と地上の自然、動植物、そして人間の創造が含まれています。

天地創造の物語をきちっと理解すると、さらに多くの大切な事柄が分かってきます。人間は神の姿、すなわち神の性質に似せて造られていること、（創世記１：２６－２７）逆に言えば、壊れてしまったとはいえ、人間に残されている美しい部分を遡れば、神の姿に行き着くことが分かります。また、人間だけが神の本姓である霊的な性質を与えられていることも明らかであり、この事実から、人間は本能的に神を感知できる能力を与えられていることが分かります。さらに神だけではなく、霊的な世界、霊的な存在も感ずることが出来る能力を持っています。それは他の生物には与えられていないものです。さらに、人間の命は物理的な反応によって生まれる生物学的ないのちとは別に、神に与えられた特別ないのち、霊的な命を持つものであることが分かります。

この神に似せて造られた霊的命が、人間を宗教的な動物としているのです。進化論ではあらゆる動植物の進化の頂点に立つ人間だけが、宗教を持っているのか、説明することができません。進化の頂点に立つ人間だけが持つ欲求でありながら、宗教は進化の過程で遅れている人間が持つものとされて、無神論こそが進化の頂点だと考えるのはおかしなことです。

理屈をこねる進化論でどれほど宗教が否定され、人間の礼拝の本能が無視されたとしても、人間の心には神に似せて造られた本能があり、宗教性がその中に組み込まれています。ですから、人間である以上、すべての人間には礼拝する本能があり、宗教を作り出すのです。そしてその宗教性が満足させられなければ、人間としての幸せが達成されないのです。

また神に似せて造られている人間には、神の愛の対象として造られていることも分かります。もちろん、創世記の天地創造の短い物語だけでは、そこまで言い切ることは困難ですが、聖書の他の部分の理解をもって読み解くと、それが良く分かります。神の愛の対象として造られている人間は、神に愛されていることが感じられないままでは、決して人生に満足することは出来ないように造られているのです。また、神を慕い、神を敬い、神を賛美し、神を崇めて生きる生き方、すなわち神を愛する生き方をしなければ、たとえどのような人生を送り、人がうらやむような生活をしていても、結局は「空の空」と言いわざるを得ないのです。

神に似せて造られている人間はまた、絶対に聖い神の聖さの写しを持っています。それは文字で書かれた律法を持たない人の、「心に書かれた律法」として存在し、良心といわれる具体的な形をとって私たちの中に保たれてきました。悪魔の支配下で、良心もまた悪い影響を受けてはいますが、誰にでも良心は存在します。（ローマ書 2：14～15）

また、人間には正しい生活のリズムとでも言うべきものがあり、6 日間働いて 1 日休むと

いう生き方が、最も良いように造られていることも分かります。それが安息日の定めです。創造の物語では、あたかも神が 6 日間で天地創造を終え、7 日目にはお休みになったので、人間もまた 6 日間働いて 7 日目は休むように、定められたように書かれていますが、キリストの解釈によると、神はお休みになることなどありません。7 日目に休んだなどと言うのは、いわば方便なのです。（ヨハネ５：１７）

キリスト教には方便はないと、よく言われます。キリスト教は嘘を言わない、聖書に嘘は書いていない、神は嘘をおっしゃらない、方便などはお用いにならないと言うのが、西欧から輸入されたキリスト教、白黒のキリスト教ですが、聖書を素直に読むと、聖書には、たくさんの嘘が出てきますし、嘘をついて神様に祝福された人も両手に余るだけいます。キリストご自身さえ、「ちゃんと」嘘を言っておられます。神はここでいわゆる方便として 6 日間の創造の働きを語っておられるのです。つまり、6 日間で天地を創造したというのは事実ではなく、当時のイスラエル人たちに、6 日間働いて 7 日目に休むという生活リズムを徹底させるために、造られた話なのです。これは本来、嘘と呼ぶべきものではなく、レトリック、表現方法なのです。ただ、事実が真実であるという考え方の強い西欧キリスト教の間では、事実に反することを言うと嘘になるのです。そうだとすると、天地創造の物語自体が嘘になってしまいます。それで、正統派を自認するクリスチャンたちの間では、つまり、聖書は誤りのない神の言葉であると信じるクリスチャンたちの仲間内では、天地創造を６日間の間の出来事として、無理矢理にでも信じようという傾向が強いのです。

創世記が書かれた当時のイスラエル人は、数百年にわたるエジプトでの奴隷生活のために、自分で生活のスケジュールを立てて、規則正しく生きることができませんでした。国民全体が奴隷として、命令されるままに行動していたからです。それが突然自由の身とされて、イスラエルの人々はまさに自由という名の混乱、混沌の世界に入れられてしまったのです。彼らに緊急に必要だったのは、きわめて原則的な行動の規則でした。それで与えられたのが安息日の定めだったのです。そしてその定めの理由付け、権威付けが天地創造の折に、神は六日間働き、そのあとの一日を休みとされたという物語だったのです。

この物語は、イエス様ご自身が、神には休むことなどありえないとおっしゃっている通り、事実ではなかったことがはっきりしています。でもこれは、当時の人間の生きるべき道を示し、神と人間のお関係を教える真理だったのです。西欧神学では、事実が真理であるかのように取り扱われることが多いために、聖書は真理の書物すなわち事実が記されている書物と考えられるのですが、聖書の教では事実と真実とは別のものです。イエス様は道であり、真理（真実）であり、いのちであるとおっしゃいましたが、それは、神につながる通路であるという意味でした。真理とは事実ではなく、神との正しい関係に関わるものなのです。

イエス様はまた、人が安息日のためにあるのではなく、安息日が人のためにあるとおっしゃり、安息日が人の生活の妨げになっている場合には、むしろ積極的に安息日を破って行き、また破るように教えておられます。このイエス様の態度が、イエス様の十字架を招いた一つの大きな要因でした。それをご存じの上で、イエス様は安息日の厳守に反対されたのです。

奴隷生活から解放されてまだ日が浅かった、モーセの時代に絶対に必要だった安息日の定めは、イスラエル民族が定住生活に入り、社会構造も複雑になっていたイエス様の時代には、何かと生活の妨げになっていたのです。つまり安息日は、すでに古い革袋になっていたということです。このことを理解せずに、いまだに安息日を厳守しなければと教え、日曜日はクリスチャンの安息日だなどと教える教会が多いのには、心が冷えてしまいます。

天地創造の物語自体が事実を記したものではなく、真実を記したものであるということは非常に大切ですが、天地創造の物語が記された目的をはっきりさせることがさらに大切です。天地創造の物語は、神の自己紹介だったのです。当時の人々は、非常に多くの神々の中に生活していました。民族によって、あるいは家族に家系によって、信じる神、仕える神がありました。それは、日本の八百万の神々にも似ていました。

そのような中にあって、私たちの神は、便宜上、神というあいまいな言葉を用いなければなりませんでしたが、その言葉を用いてでも、ご自分こそが、真に礼拝されるべき神、真に仕えるべき神であるということを教えるために、自己紹介をしなければならなかったのです。その自己紹介が天地創造の物語なのです。誤ってはなりません。これは天地が出のように造られ、どのような順序でいかにして造られたかという記述ではなく、天地創造の経緯の説明でもないのです。

当時、すなわち今から３千数百年前の人々は、現在の人間のように、科学的な考え方はしませんでした。生物学も、物理学も、地質学も、ほとんど興味のないことであり、生活に不必要な事柄でした。天文学はいくらか重要性があったかっもしれませんが、現代科学の興味とは全く別物でした。要するに、天地創造の事実などには、誰も関心がなかったのです。この物語が記されたのは、ただただ、人間が礼拝すべき神は、神々の神ではなく、神々を超えた存在、たとえ神という言葉が使われたとしても、神々とは全く異なった次元の存在、高く、大きく、強く、ほかの神々とは比較ができない、同じレベルで論じることができない、すべての面において超越した存在であることを教えるためだったのです。

しかも、その存在者が人間を造り、人間を愛しておられることを教え、人間はこの存在

者を礼拝し、感謝をささげ、信頼し、愛の交わりを持って生きるべきであることを教えるためだったのです。ですから極端に言えば、創造の順序だとか経緯などはどうでもよかったのですが、それなりの秩序で配列されています。その配列は、筆記用具もほとんどなく、読み書きができる人間も少なかった、当時の実情に応じて記されているのです。

創世記の物語は、読むものとして書かれたのではありません。読み聞かせられるものとして、書かれたのです。一人の人が大声で読み、それを別の人が繰り返していくことによって、非常に多くの人が聞くことができるように、意図して書かれたのです。優しく、理解されやすく、記憶しやすく、忘れられないように記されたのです。ですから、現代の書物とは利用のされ方がまったく違ったのです。当然、書かれ方も異なっていました。